

資料(15)

農青社「革命的地理区画の意識的樹立」(「農村青年」第三号(15-A)・第四号(15-B)・第五号——「第五章第四項に掲出」——)

資料(15-A)・(15-B)・(15-C)

「革命的地理区画の意識的樹立」以外の「農村青年」第三・第四・第五号各号の記事を以下に資料として掲出した。

資料(15-A)

藤代高雄「アナキズム運動に対する二、三の実践的見解」——「無政府主義研究」第一巻第一号(資料16)に全文掲載、参照せよ。

(資料15-B)

「吾等の農村戦線は如何に積極化しつつあるか——各県のレポート——」(「農村青年」第四号・昭和七年二月号)(二面・三面)

栃木県——「運動の行動化が叫ばれ出した。俺達はやるぞ!」

客観的状況はグングン急迫してきた。俺達は新たな決意のもとに、どしどし活発なる闘争に突入せねばならぬ。俺たちの間では愈々行動化が叫ばれ出した。最近、また×村に新しい同志の存在を確めた。この地理区画では、一月一回、同志が集合して、種々の協議をなすことが痛感されている。目下、新同志獲得の為に県下に根を張っている大衆党系の青年戦闘分子に対して、不断のアジプロが行なわれているが、全農は栃木県に於て芳賀郡がもっとも戦闘的であるが、今度この地区に対して注目すべき働きかけが見られるであろう。

「切迫せる社会状況を前にして生産党、大衆党との勢力争い」

小作争議に割りこんで地主から金をせしめ、その金で鹿沼町に製綿工場を経営する大衆党のダラ幹石山たちの労働大衆党に、政友会反動内閣が二月総選挙を断行するので、農民の選挙投票かきあつめに狂奔しているが、これも札つきの黄金魔——妾たちの剣劇大学総長が支部長の日本生産党でも、満州出兵を契機とする社会ファシストの進出のしっぽにぶらさがって、このドサクサに県下の支配権を握ろうと、各地で演説会を開いていたが、新聞に出たように、一月十日、阿久津村で大ゲンカを押し始めた。こんどの衝突は、このバカ共の勢力争いが表面に出ただけで、一般百姓は冷静な態度に終始している。何れにせよ一般民衆とは何のかかわりも無しに大衆党対生産党のあつれきを今後盛んに見ることもだろうが、農民はどちらにも中立だ。

百姓の解放は百姓自身の手で!

俺たち百姓は政治反対だ!

俺たち百姓は直接収用革命を望んでいるんだ!

京都府——「京都府の農村運動は沈滞期を清算しろ!」

吾が京都府の運動はこれまで全く沈滞していた。この事はじつに遺憾だが、最早、今後は万難を排して頑張る。これからはどしどし積極行動に出るぞ! 俺たちはうんと連絡をとろう。そして、第一に府下の農村に無政府主義の思想を拡充する。また、組合に潜入して幹部専制に眠りこんだニセ解放運動を内部から徹底的に排撃せねばならぬ。俺たちは以上の一切の必要のために、特殊な地方的出版

物を要求する。それは「京都黒色運動ニュース」の発行だ！

「時事問題のバクロを通じ現社会の偽瞞を知りたいことは青年の一般的要求だ」

府下の各村の青年の間では時事批判座談会が開かれている。また、開かれぬ村では、そうした会合が熱望さえされているのだ。過去に於ける既成政党などの欺偽に眼ざめた青年層は今までと全然異った新しい世界観を要求している。俺たちはこの動向を敏速に捕えねば駄目だ。俺たちは各村に責任者を設け、座談会、読書会等をつくって、明確な思想を青年の間に拡充しようとしている。府下の同志、全国同志諸兄に不用の思想図書新聞出版物があればどんな送呈をたのむ。これを集めて常設及び巡回図書文庫を設置するのだ。これは微々たることだが、決して軽視してはならぬ。全国の同志よ、俺たち、農村人に助力してくれ。

京都府巡回図書文庫確立の為に不用の図書文庫確立の為に不用の図書新聞出版物を送れ！農村青年社に問合せてくれれば京都府の送り先がわかる。

岩手県——「岩手県では県下の連絡がまだ取られていないが連絡の必要が痛感されてきた！」

岩手県に於ける連絡はまだ取られていないが、連絡の必要が痛感されてきた。岩手県下の同志諸兄の連絡を頼む。（岩手県下の同志諸兄は農村青年社まで一報あれ。このレボの通信者に取次ぐ——農青社）警察の暴圧に喘いでいる。吾々の区劃はまだ初歩だからスパイに嗅ぎつけられると、読者程度の人にはベシヤンコに叩きつけられる。だが不断の再建をつづけている。

「黒色文化闘争同盟は如何なる反動的役割を為しつつあるか」

一人の真の同志の獲得が如何に困難なことであるか。それと同時にどんな事情が革命的青年を墮落させるか！黒色文化闘争同盟の正体をバクロせよ。それはAという「農民」の男についてだ。Aは「農民」の仲間だった男で仲々しつかりしていた男だが、「農民」の生ぬるさと好い加減の駄ボラと、それから一向に革命というものの認識のない奴等「農民」一派の態度にアイソをつかし、漸次、華やかな赤の運動に転落することになった。AのほかにBというオルグ的人物は上京して、「農民」一派のイズムの空虚に失望して赤へ去った。なぜ、かれ等は赤へ行つたか。その原因を考えて見ると「農民」の単なる文学的非実践的態度に対して、漸次成長してきた革命の情熱があきたらなく、赤の方へ動いて行つたのだ。強権に対してつよく反感を抱き、反都会の態度も事実であったが、革命的実践のない行動的何物も持たぬ一切のものに見限りをつけたのだ。革命の実践的何物もない一切の紙上運動を清算しろ。黒色文化闘争同盟をたたきつぶせ！

福島県——「ロシアの曝露が絶対に必要だ！ボルの偽瞞を百姓にさらけ出せ！」

もっとうんとロシアの曝露をやって貰いたい。農村青年は欺されてるんだ。それから第二は文学的存在だが、これは運動の癌だ。かれらは薄弱で、切角、新らしくはいってくる青年を紙の上の闘争へ解消してしまう。実にたまらないことだ。

「全農県聯合会に潜入しつつある」

全農県聯合会への潜入を目下計画 중이다。二、三年前までの全農県聯合を牛耳っていた同志は、いま除外されてしまった。俺たちは奴等の警戒をくぐってやっと組合に潜入したぞ！大きな仕事ができそう。

「反戦ビラが兵営に撒かれた！果然、大問題化しつつある」

ミリタリズムの手先きに如何に百姓が××されているか。そんなことは判りきっている。ところが果然××部隊に反戦ビラがうんと持ちこまれ、で部隊は出征部隊であるだけに大問題を惹き起こしているが、犯人は全くわからないそう。しかし、これがアナキストの仕業であることだけは確かだ。

俺たちは今こそ帝國主義戦争反対の真の意味を民衆に告げねばならぬ。ミリタリズムとファッショの空氣に酔って、彼が何であるか忘れてる百姓の兄弟に全的努力をはらって訴えねばならぬ秋だ。

岡山県——「実践的非法手段によって闘争し來った過去の一年！そしてまた本年も！」

今、過去一カ年の吾々の闘争の跡をかえりみるならば、そのすべては潜在的非法的手段による、主として××、××地方の全青年に対する働きかけであった。そのうちでも××村には勢力を集中した。然るに吾々の闘争の不充分にもとづくものか、効果の見るべきものは余りなかったのは実に残念である。だが、この結果を短時に期待するのは誤まっている。本年も精力的なアジプロに不断に闘争する！表面的には何の現われも見えない、が青年の内面的思想には断層的な進展があったことは疑う余地がない。これからだ。

山梨県——「一昨年は豊年で飢え、去年は凶作で飢え、運動の強化拡大には絶好のチャンスだ！」

「如何になすべきか」について言いたい。青年会の乗っ取りについてはこれはボル系の連中によって実践されて試験済みだが、いつも失敗に終わってきた。それは村当局の奴等の眼のかたきとなつて、全村の反動を強化する以上効力はない。何よりもそうすることにより、村からの補助金を断たれ、機能を失つても足も出ぬ無力な青年団体化されてしまう結果になる。これは他のグループをたてて、がっちりした意識分子をひっこ抜いてしまつて、固そのものを利用するようにするのがより効果的だ。

それから全村運動は、今日の農村にあっては、より分散的に部落運動へと行かねば駄目だ。しかし部落觀念はともすれば愛郷心と結びついて反動化する憂がある。部落運動は部落ハチブによって裏切者をやつつけることができる程度まで、スキップを防止することができる。

一昨年は豊年で飢え、去年は凶年で飢え、運動の拡大強化には絶好のチャンスだ！

長野県——「製糸工女賃銀不払の暴挙に闘え！」

長野県をはじめ、山梨、茨城、群馬、その他の全国製絲家は、去年の暮の終業の時に、世界的不況という都合のよい口実で、工女に

賃銀を支払わなかった。搾取飽くなき製絲家どもは、まる十一カ月、血の出る思いで働いた私たちに、たった五円とか三円とかの涙金だ。そして汽車賃だけで追っ払った。一昨年からの不払賃銀を一文も貰えず、火の気もないような家へかえると、すぐ後から、会社からの首切りの通告だ「不況の際人員淘汰の都合で解雇する」。ところが、どうだ。その下から運動員を農村に入りこませ、新しく、女工募集をどしどしやっている。賃銀をウヤムヤに棒引きにして、こんどは別の新しい女工募集をどしどしやって、二、三年間ただで働かせ、丸儲けするはらだ。全国の同志よ、兄弟たちよ、これが黙っていられるか。しかも春挽きの始業が目のまえにせまっている。対策が必要だ。始業と共に要求を出そう。要求貫徹までは始業は拒否だ。

- 一、従来の不払賃銀を即時支払え 一、賃銀を月二回の現金払いにせよ 一、前借金を無利子にせよ 一、最低賃銀を三十五銭にせよ 一、セリブレンの検査絶対反対 一、賃銀の算定方法を公開せよ 一、解雇者に不払賃銀を即時支払え 一、寄宿舎の暖房装置、衛生設備をせよ

(以上××は判るものは全部文字に換えて掲載した——刊行会)

(第四面)「ボル農民委員会の曝露」

農村でのボルの運動は非常に後退している。こう言えば、それでは全農(全国農民組合)は何だ。全農の六割はボルの指導に獲得されているではないか。というものがあるかもしれない。だが、問題はそんな所には無いのだ。ボルの指導の下にある全農部分がこれまで為してきたことは何であるかと言え、所謂、小作料減免闘争だ。言いかえれば、かれ等の全闘争は農民の目的的利益に対してのみ戦うことであつた。

即ち、ボルの農民闘争は小作争議に限界づけられた日常闘争主義に過ぎぬのだ。詮じ詰めれば、かれ等のイデオロギーは改良主義を出るものではない。限界づけられた小作争議に対して尖鋭に闘うことだけで、決して、問題は根本的には一歩も解決されない。即ち、俺達の闘争が革命によるということだ。如何に左翼的なことを言っても、それは社会民主主義の指導精神と何等異なるところはない。生活擁護のために闘うことなら、判事、検事すら減俸反対の為にゼネストを敢行したではないか。日常闘争を尖鋭に闘うことは、毫も革命の核心に触れることではないのだ。ボルの問題は出発の第一が、農民をかれ等の支配下に獲得するというところであつて、農民をかれらの権力に訓練することが目的である。この目的の為に、かれ等が日常問題、特に小作問題(否ボルの農民運動の機関紙「農民闘争」によれば「小作争議にのみ限定した」と告白しているが)を採りあげて、農民の目的的利益を解決することにより、永久に農民を眞の解放戦から切離してきたのである。

俺たちは、秋田、あるいは山形の全農系の農民の最近の動向に何を見出すことが出来るか。この二県は、共にかつては最も戦闘的県

聯をもった。小作争議に尖鋭に戦われたのだ。そして、犠牲者は相繼いで獄に下つた。

だが、見る、果敢だった闘争は結局何を収獲したか。人心はすびき、購買力は衰え、農民の疲弊困ばいはただ倍旧したのみである。そこで、農民は漸次、全農の組織から去り、その指導から袂別し、山形県に於て最近あらわれて来たように、小作料減免の為なら何も全農に入らなくとも、俺達で地主と直接交渉するという空気と、そして、結局、同じような解決しかならないのなら犠牲を出すよりは穏便に協調して地主と談合した方がよい、という空気が醸成されて来た。そして、かような雰囲気にある全農山形県の実体は今日どんな物であるかと言え、一例をあげれば、酒田には酒田消費組合準備会というマルクス・ボーイの寄合世帯があるが、殆んど男は文学青年で、組合の実質的な仕事は女がやっているが、彼女たちはコロンタイズムの信奉者であるということだけで、これだけで彼等がどんな連中かは想像がつくと思う。

この状態は、多かれ少なかれ、全国的に見て共通である。即ち、農民の要求は小作料減免の問題なら、同じ事だから犠牲の少ない方法をとろう。全農にアジられて火傷するには及ばないという考えをもつに至っている。

だが、この事実が農民を反革命と片付ける証拠にはならない。百姓の眞の腹のなかはどうなのか。意識的農民は眼ざめつつある。農村青年はいかに意欲しているか。それは決して利害のための妥協闘争でなく、農民の全的解放の革命である！農民は眞の解放のために血の闘争をなしているのだ。

そこで何うだ。ボルでは、俺達が五年も前に清算した日常闘争主義の間違いを、漸くこの頃になって発見しているんだ。だが、そんな不完全極まるものだ。すなわち全農の組織「農民委員会」に置き換えようとする最近のかれらの動向を見よ。かれらは今になって小作争議にのみ限るといふ傾向や、単に尖鋭であるというだけでは意義がないということや、闘争分野は小作に限らず生活の全面にわたるものである等々の判りきつた問題が漸く批判されつつある。

そして、その答は「農民委員会」を組織しろだ。組織して何をやるのだと言え、今日のところ抽象的に「支配階級の政治支配そのものに直接に対立する機関である」云々と。彼等は行動と実践に対する明確なる考えがなく、ただ組織論を論じているにすぎない。即ち「農民委員会」という大きな容積を組織して、農民をその中にかき集めようとしているのみだ。(筆者山形・菊地清吉)(?)

「農村青年」昭和七年1932三月、第五号「黒色運動の前進の為に」

極東の渦巻はいま俺達の胸を躍動させる。満蒙、上海事件、日本ファッショの抬頭、ボルシェヴィキ最後の乱舞と一般社会主義のファッショ化、しかし、全民衆に刻一刻、飢餓の鬼畜に逼迫する。この事実を前に俺達は如何に処さなければならぬか、言うまでもない、吾等少数者の堅固な意志と果敢なる行動に拠って来るべき革命を準備する、今、切迫する革命の機に直面して多言は駄目だ。一刻も早く備えよ！これだ。

俺達、全国の農青同志は、その為に、日夜勞苦し、凡ゆる苦難を冒し、全面の敵と抗戦し來った。しかるに、今、幸か不幸か、吾々の陣営から農青への卑近なる非難の声を聞く。ああそれ何の謂いぞ！

吾々は、偶々この運動の中で、あられもないデマや中傷が、吾々の同志達をふかき憂鬱に陥れ、あるいは運動の惰沈を來らしめるのを見てきた。そして、今、吾々自身の上にふりかかった非難、及びそれに対して、敵との対陣中に、なお、これを振りかえらざるを得ない場合である。この場合とは果して何であるか。

農青運動の現実

先頃から頻々として起こり、聞かされてきた言辭は「都会に於て農村青年社とは何ぞや」等々の実に近視的非難のそれであった。しかし、この問題はすでに吾々同志の熱烈なる革命的意志と行動とによって、各地同志のつとに事実の上で承知し、而かも、その実践が全てを解決すると、敢て顧みざる處であった。そして、吾々の同志達は、あるいは山間僻村に、あるいは地方都市にモグラの如く、真摯に行動し、決死的闘争をつづけてきたのだ。かくて、今日、漸く吾々アナキスト革命の現実の要求に即する外廓を劃しうべき日を期するに至った。

この時、この運動に対して、吾々アナキストとして、実に聞くに耐えざる誹謗の言を聞く。いま、その誹謗の言とは何か。今日、この国に於けるアナキスト新聞と呼ばれている「自由聯合新聞」一月号紙上の「迷蒙主義者に与うる書」と、大阪の「黒旗」紙上の「僕はこの考える」(木下茂)という論文の趣旨についてである。

これについて、吾々の農青運動の実体を知らぬ者はいざ知らず、少なくとも、この運動に接触した同志の眼識を以てすれば、それが如何に無理難題な難解なものであるか、一目瞭然だ。だが、吾々はこのふりかかった火の粉をふり払わねばならぬ。

「自聯新聞」一月号で、宮田某は「最近(農村青年)(無政府主義研究)(黒色戦線)等の発行者並びにその周囲にある連中から盛

んに(啓蒙主義)なる言葉が吐き散らされているが」と言い、「その意味は解放運動における啓蒙的役割の過重評價が行なわれたと言ふにあるらしい」と言う。そして「それ故(啓蒙主義)なる教化主義は彼等だけの動きを規正したものとして始めて、その全意味を理解することが出来るのだ。自身にあたえたその規定を、複雑多様な全戦線に押しつけることはこれこそ重大なる迷蒙であり、認識不足も甚しいと言わざるを得ない」と漸く論結している。

何というミゼラブルなデマゴグである。吾々はかつてかかる言葉を吐き散らした覚えは唯だの一度もないのだ。にも拘らず、宮田某はこの言葉を捏造してひとり力み上がり、得々として無政府主義運動の公式主義的論理を以て、吾々の運動を(啓蒙主義)のそれに陥れ、迷蒙主義と規定せんとするペラボーだ。だが、今、何がアナキスト運動であるかは宮田某の難解なる説明の致すところではない。すでに吾々の同志の全地方にしかも全力を傾注して闘争しつづけている事実が今にそれを明らかにするだろう。

曲解な余りに曲解な

「黒旗」創刊号では木下君は「農村青年社も機関紙『農村青年』十二月号に於てパンと自由社が冒した誤謬を憶面もなく羅列し云々」と言い、「農聯は未開地に種時運動を旺盛にした。同志のいない地方、郡、村におけるこの運動が何故に農民の中への精神であるか、この動きをもって農民の中への弊害があると論難する者は運動の実体を知らぬ者だ」と言う。しかし、「種時運動」とは、とりも直さず、「農民の中へ」であることは、今、何人も疑う余地はない。而して、農聯がその農民の中への運動であったと言ったことによつて「農青はパンと自由社の冒した誤謬?を憶面もなく羅列し……」とは全く的外れだ。

しかも、何人も「農民の中へ」の運動が弊害があると論難しない。無論、農青は「その歴史的役割は果され」と記し「小作人時代と農青時代とのこの歴史的差異」と記述した。これ、正にこの運動の歴史的事実を指摘したものだ。これをしも「論難する者」とは甚だしい曲解と言わねばならない。吾々の運動は決して固定し、躍進しないものではない。

「小作人」が種時きしたものでなく、種は萌芽し生成する。而して、成長は咲き結実する。それは寧ろ自然である。吾々にはこの運動は決してどうどう廻わりでなく、一大躍進だと信じて疑わない。なお、その他、同君は「農村にも運動の脱落者はある。その若干の例をとって、農聯が脱落者を培養したと結論するのは運動に対する冒瀆である」と言う。例えば、若干か、あるいは脱落者かは知らぬ、しかし地方に「存在のアナキストのあるのは争えぬ事実だ。だが、この事実を誰人も「農聯が培養したと結論する」者はない。況して、農青は「農村と都会とを問わず、既成アナキストの比較的多数は種々なる事情のもとにいわゆる存在のアナキストとなりうせ、云々」と記したものだ。これを以てしても同君が如何に曲解しているかは既に明らかである。

木下君は「これ一体なにをいわんとするのか了解に苦しむ」点が多々あるようだけれどもそれはながく病床にある同君としては、また無理からぬことである。「自主行動の強調、これは最早強調するだけでなく、むしろ、今日、すでにその実果が持っている事実だ

から、今更喋々を要しない。で、茲に、これらの曲解な言辭を敢て細々と云々することを止める。だが、何故、吾々の農青運動がかか
る非難を見ることになったか？

實力の要求

そもそも吾々の農青運動はアナキスト運動の分散的自主行動によって、全国的に盛りあげられたものであった（農青十二月号参照）
しかるに、ある一派の人々には前述の如く「都会に於て農村青年社とは何ぞや」と嘲笑し、農青が如何にして革命の実行を期すかにつ
いて殆んど無理解であった。だが、吾々の全国の同志は自由聯合の実体を要求し、分散的自主行動によって、各地方（都市も含む）に
相互の連絡をつとめ、地理的区画を確立し、而して、全国各地の直接連絡を完行することによって、吾々アナキスト革命を期するに
在った。

しかるに今、なお戦線における組合、及び団体がこの直接連絡に無関心であり、緩慢であるならば、吾々の革命の一刻も早きを期す
るものとしては甚だウカツであり、愚である。しかも唯で新聞雑誌上に於て革命的美文を羅列するだけによって、吾々の運動の進展を
計ることは出来ないのは明かだ。事ここにおいて、吾々アナキストは一路實力の要求にすすみ、かくて吾々の農青運動と他の派の人々
との革命に対する見解の差を生じ、よって態度の差を生じた。従来、農青運動に対する無理解はかくのごとく「迷蒙主義者」を以て連
呼せしめ、また徒らなる中傷を以て、「独善主義」と呼ばしめた理由である。だが吾々はその言葉を、今、そっくり其方に返上す
る。何故なら、農青は敢て黒色運動の分散的自主行動を以て革命への実行的手段とするものだからだ。

農青運動の前進のために

アナキスト運動は政府を根絶する運動である。故に、その行動は勃然として何処から、何が、何時、何人によって仕出されるか、
それはその人達のほかには分らない。何人がそのために革命行動をとうろうとも、決して咎むべきではない。或は何処で秘密に出版物
が流布され、また何事が秘に計画されようとも、これをみだりに口外し、偶々、無意識的であろうともスパイするに等しい結果を持つ
ことは、吾々アナキストの極端に憎悪、軽蔑するところだ。まして、それを合法の新聞雑誌上に露骨に発表するに至っては実に沙汰の
かぎりである。これは決して革命家、アナキストのなすべき業でない。

しかるに、吾々の農青に於て各地の同志の情勢報道を要求するときは、これ三考も四考も要すること無論だ。だが、それはすでに事
実上にもたらす危険を充分に払い、あるいは事件の既決後といえども、その危機の憂いなき場合に於て為すにある。しかるに、吾々は
その悲しむべき事実を自聯新聞一月号及び二月号紙上の一隅に発見するはもつとも恐るべきことである。事件はまだ解決していない。
その事柄について兎角公表されることは事件のためにこの上もない惨めだ、吾々農青は今後かかるデマや中傷に対しては全然関知しな
いであらう。

強行的前進のために

全国の農青同志諸君！現下の吾々の責務は重大だ。徒らに非論理的な事柄のために時日を費してはならぬ。吾々の問題はつねに革命
と共にある。その前進のためにだけある。そうだ、吾々の前途は益々多難だ。しからば、今、精一ぱいの努力を革命のために投ぜしめ
よ。革命は吾々の全体のために逼迫する。最後に全国の同志諸君！

吾々のこの一文は余りにも大人気ないことのために書かれた。

しかし、この現実に於て、吾々の全農青同志が、自らの実践を眼前に、誤られることを拒否せねばならない。これ実にそのための一
文である。

動乱の日に近い。吾々の實力の全部をかけて、今、革命の現実性に備えよ！これ農青運動の現下の急務だ。その全要求だ。

資料(15—C)

「農村青年」昭和七年1932三月、第五号「満州新国家建設とは」

日本帝国主義軍閥は、さきに満州に出兵を断行して以来、兵幾万の死傷と一億円をこえる軍費とを以て民衆に押しつけ血の犠牲の
上に、全満州及び東蒙古を完全に侵略した。而して、今や、奉天、黒竜江、熱河、吉林の四省を打って一丸とする独立国家「満州国」
の出現となり、恰も、それは日本軍閥が将来の日本にもたらした一大功績でもあるかのように宣伝され、単純な民衆をして益々帝国
主義戦争熱をあおり、権力に信頼をつながしめんと狂奔している。

しかし、俺たちはこの「満州新国家建設」なるものの正体をあくまで究明し、その偽瞞を曝露しなければならぬ。「満州国」は断じ
て独立国家ではない。全世界に、政治的、経済的門戸を開放した自由国ではない。即ち日本帝国主義軍閥に首を扼された奴隷国だ。ロ
ボットたる宣統帝を擁して表面上の君主とし、日本に阿順する敗将兵をカイライとして要人の椅子をあたえた日本軍閥は、新国家の凡
ゆる実権を掌握し、今や、満州国は権力支配と搾取の野望を満足せしめんと狂奔している。

貨幣制度の設定から、国定教科書の内容に至るまで日本軍閥の言いなり次第だ。

満蒙の民衆は古い軍閥の虐制からさらに酷烈なる日本帝国主義の圧政へと移されただけである。だが、諸兄よ、この苦しみと不幸は
そのまま俺たちのものだ。

何故なら、満州国新国家によって、莫大な利益を得るものは日本金融ブルジョアだけだ。それと密接に結びついている日本政府、軍

関だけではないか、幾万を超える生命の犠牲と、その家族の悲慘、莫大な軍費の負担者は俺たちだ！さらに巨額な新国家の政治、経済、軍備費の凡ては、実権をにぎる必要上、日本政府から支出されねばならぬ、この負担者は誰でもない俺達だ！俺達民衆に倍化される搾取を拒否すべきだ。

今や滿蒙及び上海における帝国主義の暴虐なる侵略戦争は世界的呪いの的である。俺たちは帝国主義戦争反対だ。速かにアナキスト社会実現のための革命への村の行動へ民衆を鼓舞せよ。飢餓の脅威に喘ぐ民衆は、農村の経済的、伝統的重圧に叛逆せんとする青年に、今こそおれたちアナキストは収用革命を大胆に叫ばなくてはならぬ。

一、俺達は帝国主義戦争絶対反対だ

一、俺達は凡ての愛国運動の偽瞞を曝露し粉碎せよ

一、俺達は俺達の生存権喚願によらず自分達の力で奪還する

一、俺達は無政府主義収用革命へ